

# ネモチちゃん



島さち子

# ネモチヤン

装画

島さち子

ネモチヤン

ネモチヤンは門柱にもたれて、ママの帰りを待っていました。

道路には誰も見えないけれど、アスファルトの上にテンテンと足跡が見えました。

「誰の足跡かな？」

よく見ると、はだしの足跡みたいです。

「小さいから子供だわ。誰かな？」

ネモチヤンが足跡をたどっていくと、足跡は、足を揃えて立ち止まり、それっきり消えてしまいました。

「急に消えちゃった！ へんね。ここからどこへいったのかなあ？」

ネモチャンがさがしていると、ネモチャンのすぐ横に、足跡が現われて、ピョコピョコふえました。

「あなた、だあれ？」

答えもありません。

「へんだなあ」

ネモチャンが歩き始めると、

「あれっ！」

足跡はまるで友達みたいにネモちゃんと並んで歩き始めました。

走ると、走り、止まると止まりました。

「足跡さん、どっちにいくの？」

ネモチャンは聞いてみました。

すると足跡は、一歩、二歩、ネモチャンの前に出ました。

足跡さんの行く方に行ってみようかな。ネモちゃんは思いました。

ネモチャンは足跡を見失わないように、目をぱっちり大きく見開いて歩いていきます。

そのとき、誰かが、後ろからネモチャンの肩を、

「どん、とん、とん」

と、たたきました。

ネモチヤンはびっくりして振り向きました。

誰もいません。

「わかった！ コラコラくんでしょう？ わたしをぶって何処に隠れてしまったの？」

でも、コラコラくんは見えません。ネモチヤンは考えました。

コラコラくんだったら、もっともっと強く叩きます。

コラコラくんはいたずらばかりして、コラ、コラ、コラって叱られてばかりいるから、コラコラくんになりました。

ネモチヤンは何でも欲しがって、あたしにも、あたしにも、にもって、赤ちゃん言葉で、アタチユ、ネモ、ネモって連発したから、ネモチヤンになったんです。

ネモチヤンがへんな気持になって辺りを見まわすと、何時の間にか見たことのない町にきていました。足跡を気にして、下ばかり見て歩いてきたから、気がつかなかったみたいです。

足跡とネモチヤン、二人の進んでいく両側は木がいっぱいしげっている森でした。  
まただれかが、



それに答えるような強い風が吹きました。

ネモチャンとコラコラくんは強い風に吹き飛ばされ、必死で木の枝につかまりました。木の葉っぱが、ざわざわと動き、幹までぐらぐらしています。

「ネモチャン、変だぜ。木の幹が、地面に吸い込まれていくぞ。早く木に登るんだ！」  
コラコラくんは幹に抱きついて一生懸命お尻や足を動かしています。

木がゆつき、ゆつき、ゆれながら下に沈むので、木登りのできないネモチャンは、

「助けてえ！」

と叫ぶしかありません。

「大丈夫、ここは、U F O エリアさ！ ……おい、地球人がびっくりしてるぞ。木に化ける練習は中止だ！」

誰かの声がきこえました。

ネモチャンたちのつかまっている木の枝がすうすうと消えて、幹がどんどん下に沈んで行きま

す。  
いいえ、地中に沈んで行くのではなくて、木の背丈が短くなったのです。

「あれ、れれれれ！」



気がつくと、ネモチャンとコラコラくんは、銀色のうろこを持った変な動物におんぶされて  
いました。

そして、目の前には金色の毛むくじやら、鼻の黒いたぬきみみたいな顔、胴は銀色のうろこ、足  
に青いリングをはめた、変な動物が立っていました。

「UFOが、着陸に失敗して、故障しましてね、困っています。でも此処は安全ですよ。ここは  
UFOエリアですから」

その動物が言いました。

ネモチャンとコラコラくんは草の葉っぱに乗っかって、ふんわり地上に降りました。

「UFOエリアだって？」

ふたりは一緒に聞き返しました。

「僕ら宇宙人！！」

木だった動物がいました。足の模様が赤か、黒である他は二人の宇宙人は同じ形です。

「僕らは地球をよくするためにBBPP星雲4477番星からやって来たんです！UFOの3  
00m以内がUFOエリアです。僕の足跡について来てくれてありがとう！着陸時の事故で、  
ぼくらはUFOエリアから出ると、姿が見えなくなり、声も出なくなってしまうんで困っていた

んですよ。こんなことじゃあ、地球人に理解して貰えるはず、ないじゃありませんか！」

足跡が宇宙人だったなんてびっくりです。

ネモチャンと、コラコラくんに向かって、レーザー光線みたいな、いろんな光がパツパツと来ています。

「読み取り完了！」

「入力完了！」

「全員集合！」

小さいのや、大きいのを、痩せたのや太ったのや、いろいろな宇宙人がネモちゃんたちの周りを取り囲みました。

「わたしは、キャプテンのアスキュー。百瀬幸太郎君と二条もなちゃん、間違いないかな？」  
キャプテンがいました。

「あれっ、どうして、知ってんの？ だれもそんな呼び方してないのに？ ぼくコラコラくんさ、幸太郎なんていわれると優等生になったみたいで、くすぐりたいよ！」

本当にくすぐったくなつたのか、コラコラくんが鼻の頭をこすりました。

「そうよ、わたしだって二条もな、なんて呼ばれたことないわ。ネモネモと連発したからネモチ

ヤンのの」

ネモチヤンもいうと、キャプテンは苦虫を噛みつぶしたみたいな顔になって、

「読み取りミス！！」

と叫んで、いくつかのボタンを、ちかちかと叩きまくりました。

「ガガーン」

と、音がして、またさっきの光が、ネモチヤンとコラコラくんに集中しました。

集まっていた宇宙人たちは、声をあげて、身をふせたり、飛び上がったりにして、光をさけました。

ネモチヤンのかみの毛は立ち上がって、ハリネズミみたいです。コラコラくんの帽子は舞い上がって、天井に張りついてから横ばいしています。

「らんぼう過ぎますぜ、キャプテン！ われわれは、地球をよくするために来ているんです。荒々しいことをしては、目的と反対の結果にならないとも限らんでしょうが……」

年配の宇宙人が、キャプテンをいさめるようにいいました。

「いや、失礼。しかし、らんぼうに扱うと、ときに故障部分が、なおったりするもんでね！」  
キャプテンは足で機械を蹴りあげました。

「われわれは地球人の個人データにこだわっているんだよ」  
キャプテンはうるこにつやのない、中くらいの宇宙人です。ベルトのボタンをこんどはそっと一つ押ししました。宇宙人たちがみんな下に降りて静かになりました。

「ネモチャンと、コラコラくんのおかげで、無事、地球人のデータを採取できました。それは、これからみんなでテストしよう。さ、リキュー、指導なさい！」

リキューというのは、足跡さんです。

「それでは、まず、かわいいネモチャンから勉強しよう！」

リキューは大声でいってから、ネモチャンに向きなおり、くま取りしたぎよろ目でじっと見つめました。

「さあ、ごらん！ ネモチャンは、ほっぺが丸くてピンク色！」

「ネモちゃんは、ほっぺが丸くてピンク色！」

円になっている宇宙人は声を合せて叫び、ベルトのボタンをカチカチ、カチとたたきました。

「ね、ごらん、ネモチャンせんせのおしりには、しっぽはなくて、リボンがひらひら！」

「しっぽがなくて、リボンがひらひら！」

「ネモチャンせんせのおててには、うろこがなくて、宙ぶらりん」

「おててには、うろこがなくて、ちゅぶらりん」

リキューは、ネモチャンのデータを読み上げるのに、一生懸命です。

他の宇宙人たちも一生懸命学習していました。

「ネモチャンばっかり！」

コラコラくんが、ぷりぷりしています。

「ドンドンドンドン、ドド、ドロロロ……チカ、チカチカチカ」

リキューはベルトのボタンを、低く、たかく、激しく、ゆるく、叩きました。

宇宙人たちは興奮して、ざわざわ動きながら、それぞれのベルトのボタンを打っています。

「ん、まあー」

ネモチャンは声を上げました。

どうでしょう。宇宙人たちはいつせいに変身しました！！

ネモチャンに似せて変身したみたいなんです……。

「あら、いやだあ」

ネモチャンがくつくくと笑いしました。

鼻の頭の黒いニセネモチャンは、あわててボタンをたたき、鼻の頭を赤く変えました。

「赤じゃない！」

ネモチャンはふんがいました。

その隣のネモチャンはいやだなあ。しっぽはそのまま、顔はけむくじやら、ブラウスのしたから、おへそが出ています。

そのとなりのネモチャンはひどいこと、スカートをはいていない。

その隣のネモチャンは洋服がうしろまえ。

「みんなネモチャンと全然違うわ！！」

ネモチャンは笑いながらいきました。

「いやはや、UFOの故障が影響しているのかな？ それとも僕のデータ入力が……。いや、みんな違うところをみると、どうやら、きみたちのミスだろう！ さあ、みんな、ようく、ネモチャンをごらん。はやく、ネモチャンそっくりになること！ きみたちはみんな、44777星人なんだ、いいか、誇りを持って！！」

リキューがいうと、みんな、しんけんな顔でネモチャンとベルトのボタンを交互に見つめま  
した。

「はいっ！ ド、ド、ド、ロロ……カチカチカ！」

またみんなが、ネモチャンに変身しました。

「よし！ では、今度は、コラコラくんだ！」

キャプテンがいました。ようやく、出番の回ってきたコラコラくんが、のっし、のっしとみ  
んなの輪の中央に立ちました。

「ぼく、コラコラくんでーす！」

いうと、胸をはって宇宙人を見回しました。

「へんなコラコラくんに変身したりしたら、承知しないぞ！ ぼくいじめっ子なんだからな！！」

「いじめっ子？ いじめっ子って、何んだらう？」

宇宙人のなかから、声があがりました。

「いじめっ子！ いじめっ子！ いじめっ子！」

宇宙人がささやいています。

「さあ、ごらん、コラコラくんは、ほっぺが四角で、きずだらけ！」

キャプテンがいうと、

「ほっぺが四角で、きずだらけ！」

宇宙人はいつせいに声を張り上げました。

コラコラくんはあわててほっぺを手でこすりました。

「ね、ごらん。コラコラせんせのおしりには、なーがい尻尾が、ぶーらぶら！」

「なーがい尻尾が、ぶーらぶら！」

ネモチヤンがびっくりして見ると、コラコラくんのベルトが尻尾のように、たれています。

「コラコラくんの体には、脂肪がのって、ブツク、ブク！」

リキユーが身長、体重、胸囲……を打ち込みました。

コラコラくんはプリプリしてリキユーの尻尾を引っ張りました。

「こら、こら！」

キャプテンがコラコラくんを押えましたが、ときはおそく、リキユーはもんどりうって、倒れ



ていました。

でも、引っくり返っても、なお、リキューは仕事を忘れません。

「コラコラせんせのお靴には、あおむし3匹すんでいる！」

「……あおむし3匹すんでいる！」

みんなは嬉しそうに声を合えました。

ネモチャンはこのとき、やさしい風が過ぎていったような気がしました。宇宙人はあおむしに、やさしいみたいです。

「チカ、チカ、チカ」

ふと、みると、ネモチャンの前に五人のコラコラくんが立っていました。

「みんなよく出来たな。それでこそ、任務を遂行できるぞ。われわれの計算では、地球上の生物に変身している限り、UFOエリア以外でも、姿、声をもつことが出来るとわかっている。地球人になるのは、この要領でいけ！ 忘れないように！」

キャプテンは、大満足でいいました。

「はっ、はっ、は、よく出来すぎて、どれがほんとのネモチャンか、コラコラくんか分らなくなっちゃったな。ああ、ほんものは輪のまんなかだったな……。本物のコラコラくとネモチヤ

ん、どうもありがとう！」

キャプテンが言うと、みんな、頭に手を上げました。

「それ、ネモちゃんのお辞儀だったら、まちがいよ！」

ネモちゃんがいうと、みんなそろって、頭を下げました。

ネモちゃんはよくわからないけど、とてもいいことを、してあげたような気がして嬉しくなりました。

でも、ちょっと、ほしいな、とネモちゃんは思いました。

ほんもの以外のネモちゃんには、まだ、洋服の下に、ベルトのボタンがあるような気がします。

あれがほしいの！！

「わたしにも、わたしにも、にも、にも、ネモ、ネモ、ネモ、ネモ……」

ネモちゃんの声が、UFOエリアに、こだまして、ひびきわたりました。

「やーい、やーい、ネモちゃんの、ネモネモが始まったぞ！ やーい！ やーい！ やーい！」

コラコラくんが叫びました。でもコラコラくんはひとりではありません。

「ネモちゃんはいつだって、何だってほしがるんだから。だから……から、から、から、から、ら、ら、ら……」

あつちでも、こつちでも、おなじことを叫んでいます。

1人、2人、∞人、4人、5人、コラコラくんはいっせいに野球帽を投げ上げ、飛び上がってキヤツチしました。

五人ものコラコラくんは、憎らしい時のコラコラくんです。

たくさんの家来を引き連れているみたいに、いばりくさって、声を合せています。

「何人ネモがいたって、ぼく、ごまかされないぞ！ ネモネモって甘えているのが、ネモチちゃんにきまつてるさ！」

「わたしだって、わかる！ ほんもののコラコラくんは……」

でも、ネモチちゃんは、8人いるけれど、話す言葉はひとり。コラコラくんのほうはネモチちゃんのほうより、オツチヨコチヨイなのか、物まね好きなのか、動作も、話すことも5人一緒です。

「わたしだって、わかるわ。コラコラくんは、いちばん憎たらしいからわかるもん！！」

ネモチちゃんだって、負けてはいません。

「じゃあ、どれか、あててごらんよ、よ、よ、よよ！！！」

ネモチちゃんは五人のコラコラくんのまわりを、ゆつくりと回りました。

ほんとにうまく、変身している、しつぽの出てるのや、鼻の黒いのなんか、一人もいません。

おでこや、膝小僧のかすり傷まで同じです。

「あつ、そうだ！ コラコラくんのベルトは、はずれてぶらぶらだけど、シャツの中のベルトにボタンはない筈よ！」

ネモチャンは、コラコラくんのシャツのお腹の辺りを、ちよつと、つついてみました。コチン。ボタンがあります。

もうひとりのコラコラくんのおなかも、コチン。

3番目のコラコラくんも、コチン。4番目のコラコラくんもコチン。

5番目のコラコラくんにきまりです。

「ほんものの、コラコラくんは、これ！！」

ネモチャンは指さしました。

「けっけっけっ、けっ、け」

コラコラくんはみんなそろって下品な笑いかたをしました。

「こらこら、きみたち、そんな、品のない笑いかたをしてはいけないな。いくらなんでも地球人になったからといって、それでは、地球をよくする目的を達成することは出来まい！！」

キャプテンが、目の周りの、銀色の毛をパフパフさせて、いいました。

「はい！ すみません、悪いことは最小限にすることを、誓います！」

五人のコラコラくんは宇宙人らしく甲高い声でいきました。

「へんねえ！」

ネモチャンは、5番目のコラコラくんのお腹をちよつと、つつきました。コチン。

「うわあ、みんな、ボタンをもってる？」

ネモチャンはびっくりしました。

「コラコラくんばっかし、ボタンもらったんだわ！！ わたしにも、わたしにも、ニモ、ニモ、

ネモ、ネモ、ネモー！！！」

ネモチャンは、コラコラくんがうらやましくて、さっきの、5倍も、10倍も、大きな声で叫びました。

そのときです、ひとりのコラコラくんに止まっていたテントウ虫が、ネモチャンのかたに止まりました。

「あら、可愛い虫！」

ネモチャンは、ふっと、ほしかつたものを忘れて、テントウ虫を手の上において、にっこりしました。

「へんだなあ、変わった地球人もいるのかな？ 地球人は自然を破壊し、動物や、植物をぎゃくたいしているって、地球から助けを求める泣き声が、44777星に絶え間なく届いて来るんだ。そこで、われわれは、地球人に自然を愛する心や、動物や、植物の身になってものを考える、聡明さや、やさしさを、取りもどさせるために、やって来たんだよ！」

キャプテンがネモチちゃんを見つめながら、考え深げに首をふりました。

「そうめいさ、やさしさだって……？ へんなの？」

コラコラくんが不満そうにいいました。

「ぼくは勇氣や、たくましさが好きさ、好きさ、きさ、きさ、きさ……」

5人のコラコラくんが同時に、ガンマンみたいにピストルを発射する真似をしました。キャプテンがリキューに手を上げて合図しました。リキューの手が、右手にいるコラコラくんのベルトに、そっと、ふれました。

あれっ、きがつくと、ネモチちゃんの耳に、 TENTOU虫が、耳かざりみたいにぶら下がっていました。

「宇宙には TENTOU虫はいないが、地球にきてから、データをインプットして、変身することが可能になったんだよ」

リキユーがいました。

そのときです。小さな小さな声がしました。

「そうさ、ぼく、変身したのさ。ボタンを打って、自分でテントウ虫になったんだよ」

コラコラくんの声です。

「ん、まあ、コラコラくんばかり、いいの！！ ネモチャンにも、ネモチャンにも、にも、に

も、ねも、ネモ、ネモ……」

ネモチャンはコラコラくんがうらやましくってたまりません。がまんなんて、いや！！

「なんでもいいわ、ばけてみたいの！」

ネモちゃんの目が夢見ていました。

「しかし、地球人が変身した場合、もとの姿に、もどれる、ほしよはないので……」

リキユーが口ごもりました。

「うちにいるとき、お姉ちゃんと同じものをほしがると、パパもママも、いい子だから、いい子





リキューは銀色の毛を切り揃えた手首から、金色の長いくちばしのような爪をだして、ネモチャンのボタンを押してくれました。

「こんどは、わたしがボタンを操作します！」

といったとたん、ネモチャンのおなかの温かい真っ赤なスカートが、トウガラシみたいに細くなりました。

「あれ、れれれれ！ わたし、まだ、ボタンにさわっていないのに！」

あわてているネモチャンの手は、たちまち、透明になり、バリツと、横に突っ張りました。

ああ、目が回る、目が回る。足は上についているのか、下についているのか、何本なのか、ちつともわかりません。

「あつ、あつ、あつ、あつ」

ネモチャンは叫びながら、とんぼ返りをくりかえし、やつとのこととで、なんとか、スイスイ飛べるようになりました。

「小さな虫が、どんな暮らしをしているのか、味わうことだ。そうすれば、地球人がどういう態度でいるべきか、わかってくると思うのだが……」

キャプテンが言っています。

ネモチャンは、スイスイ空を飛びました。

いつのまにか、UFOエリアを出て、夕空を飛んでいました。夕日がとてもあかるいのですが、不気味な、鳥の影が過ぎます。

「ほらっ！ くちばしだけじゃなく、足もつかいなさい！！ 迷いトンボくらい取れなくて、どうするのよ！」

黒い鳥の声です、お母さん鳥が赤ちゃん鳥に教えていました。

トンボを狙っている鳥の目がいくつもいくつも光っています。黒い鳥の赤ちゃんがネモちゃんトンボをめがけて、突進してきます。

「危ない！」

ネモチャンは宙返りして、急降下しました。

コラコラくんと一緒に、テントウムシだってよかったのに……。でも、コラコラくんはテントウムシだから、トンボよりよく飛べないかもしれませぬ。ネモチャンは夕焼けの光りをすかして、

お腹のボタンを確かめました。

きょうのところは人間にかえりたいわ。<<<<>>>>K J I H G F E D C B A、トンボになる時の反対におしてみました。でも、だめ！！

ネモチャンは透きとおった羽をピンと合せました。

「ネモチャー！ コラコラクーン！ ネモチャー！ コラコラクーン！」

どこか下の方で、呼んでいる声が聞こえました。

人影は、だんだん近づいてきています。

パパとママ、こんどは、オネエチャンも。

ネモチャンは一生懸命そっちに向かって飛びますが……、もうだめです。動けません！

ついに力尽きて、落ちました。

トンボのネモチャンは死んだように眠りました。そして、羽の上の朝露がかわくと、また家に向かって、とびました。

パパはちょうど会社にでかけるところです。

「わあ！ いい天気だな！」

空を見えています。

「飛んでいるのは、ただのトンボじゃない、ネモチャンよ！！」

ネモチャンはパパの頭の上をグルングルン回って、だんだん下に降りていきます。

パパは空を見るのをやめて、すたすたと駅に向かって歩き出しました。

ネモチャンが昨日、帰らないで、あんなにさがしていたのに、ネモちゃんがいなくても、パパは平気で、とても元気みたいです。

「やだなあ、パパ。こつちを見てよ！」

ネモチャンは空から声をかけますが、何度声をかけても見てくれません。

「えーいつ！ すいすいすいの、くるりっ！」

ネモチャンはパパの目の前に舞い降りました。

「おや、赤トンボか。秋だなあ！」

パパはいいながら、通り過ぎてから振りかえりました。

あれっ！ ランドセルをかついだネモチャンが家の門から出てきました。

「やだあ、あれは宇宙人よ！」

ネモチヤンは叫びましたが、パパには聞こえないみたいです。

ネモチヤンはパパの耳にとまり、

「パパ、わたしが、ネモ……」

といいかけた時です。パパったら、さっと、大きな手で、ネモチヤントンボをつかまえてしまいました。

ネモチヤンは羽を押えられて、身動きできません。

パパは、

「ワッハ、ハハハハ」

笑っています。

「おおい、ネモチヤン、赤トンボをつかまえたよ。学校にもって行って、虫ピンで止めなさい！！」

パパは、ニセネモチヤンが追いつくのを待って、笑いながら、赤とんぼを手渡しました。

「パパ、いけないわ。トンボを殺しては、地球のためによくないよ！」

ニセネモチヤンはいくと、トンボを見る間に手ばなしてしまいました。

「ハッハッハッハッハッハッ、ハッハ、ハッハ、ネモは理科がすきなんじゃなかったっけ？ パパはお医者さんになってもらいたいとおもっていたんだよ！」

パパはニセネモチャンの頭をなでながら、いいました。

「お医者さんになることは、地球のためになると思うんだがな？」

パパは残念がっています。

「人間もトンボになれば、トンボのことがよくわかると思うわ」

ニセネモチャンがっています。

「ぼくだって、子供の頃は、いろんなものになりたいと、夢みたものさ！」

パパはニセネモチャンと手をつないで、とても楽しそうです。

「今は？」

ニセネモちゃんがパパをのぞきこんでいます。

「きょうのネモは、ちよつと手ごわいな！ ハッハッハッハッハ」

ネモチャントンボはニセネモチャンの耳にとまりました。そしていいました。

「わたし、ほんとの、ネモ！」

「ブーン」

ニセネモチャンは鼻に皺をよせてからいいました。

「このトンボ、パパにつかまえて、ほしいんだって！　パパ、わたしは、むかしのネモが、やってみたいに、糸を結んで飛ばしてみたいの！」

パパはニセネモチャンの耳から、またも、ネモちゃんトンボをつかまえました。ニセネモチャンが糸を取り出し、ネモチャントンボの胴に食い込むほど強く結びました。

「ほら、苦しいでしょう！　さあ、お空を飛んで！」

ニセネモちゃんは、ネモちゃんトンボを空にむかって、ほうり上げました。

ネモチャンは、逃げようと一生懸命になりました。でも、突っ張って、よく飛べません。

「ほら、くるしいだろう！」

ニセネモチャンはパパから糸のはしを受け取ると、ネモチャンの腰が千切れるほど糸を引きま  
す。

「あつ、そうだ、ネモチャンがいらぬなら、コラコラくんにあげようかな？　彼なら、とっても喜びそうだけど、ああ、だめだ。コラコラくんには研究心がないんだった。そうだな、標本を作ってる知り合いの子供にでもあげることに、しよう！」

パパはネモチャンが苦しがつているのにヘツチャラで、糸をつけたまま、紙で三角に包みポケ

ツトに入れてしまいました。

ひどいパパ、ひどい宇宙人ネモ！！

「死ぬよ、死ぬよう！　パパ！　トンボが、ネモだってば……、トンボだからってひどいわ！　たすけてよー！」

ネモチャンが、いくら、わめいても、もう、どうすることも出来ません。

下手に動いたら、糸が巻きついてしまいます。

大空をすいすい飛べるとおもったのに……。

パパはニセネモチャンとわかれて、駅のプラットホームに立っているみたいです。

ネモチャントンボは、涙もかれはてて、虫の息です。

「あっ！」

誰かが、どしんと、体当たりしました。パパが、びっくりした声を上げました。

そのときです。ほんの少し、ポケットが開いて、紙のなかが、ぽつと、明るくなりました。

「なんだ！　幾らも入ってねえなあ。なんだこりゃ。汚いティッシュなんか、ポイだ！」

どうやら、パパのポケットから、小銭入れを誰かがすりとったみたいです。

いっしょにネモトンボまでつかんだのでしょう。



ネモチャンはティッシュに包まれたまま、プラットホームに横たわっていました。靴が、ネモチャンの羽を踏んでいきました。

「いたーい！」

こんどは、靴先で蹴とばされたみたいです。

なんか、ティッシュペーパーが、ごそごそ、音を立てています。

「……虫みたい……わたし、トンボが虫に食われてるとこ、みたことあるよ」

誰かが話しています。

ネモチャンはもう半分死んでいるみたい。

「ごそごそごそ、がさがさがさ、ごそごそごそ、がさがさごそ」

ネモチャンは目をつむっていました。

「ぼく、けむしだよ」

ええっ！ けむし？

「毛虫さ、ほら、ちようちよになる毛虫だよ！」

そういえば、毛虫はちようちよなんだわ。ネモチャンはおもいました。

「毛虫さんが紙をかじってくれたの？」

「はやく、紙からでるんだ！ 踏まれないうちに、はっばにとまれ！」

ネモチヤントンボは、毛虫に助けられて、ようやく葉っぱに止まることができました。

どれくらいたったのでしょうか。ネモチヤントンボは、目を開けました。

トンボの複眼で360度見えました。

ここは、駅前、大勢の人が、いたり、きたりしています。

あつ、コラコラくんの友達の三太や、正ちゃんがいる。

あつ、小さなテントウムシを囲んでいます。コラコラくんだわ。きつと。

コラコラくんは羽をむしられてる、ああ、すっかりむしりとられちゃった！

今度は赤のマジックインキをぬられています。

かわいそうに！ 三太たちは、けらけら笑いながら、学校の方に走っていきました。

あんなに元気だったコラコラくんが、コンクリートの上で身動きもできないでいます。

ネモチヤンはありったけの力をふりしぼり、さつき飲んだ朝露を、管をのぼして、テントウム

シのコラコラくんにふりかけました。

車が、凄いい勢いで上を通り過ぎました。

排気ガスで頭がくらくなりました。

ネモトンボの赤いしつぽも、コラコラてんとうむしの黄色い羽も、油でよごれています。もう命は長くないのかもしれないかもしれません。

人間はじぶん勝手！！ ネモちゃんはおもいました。

「コラコラくん！ 飛び立つのよ！！ 飛び立とうよ！！」

ネモチャンは、糸を引きずって全身の力をあげて飛び立ちました。

「ママ！ ママならトンボになってもネモチャンだと、見分けてくれるわね！」

ネモチャンは身体の痛みを我慢しました。

そして、一度登ってみたいと思っていた、公会堂の大木のテツペンに止まりました。

白い雲が空をゆうゆうと流れていきます。

みんな、小さく、小さく見えました。

ネモチャンの家の赤い屋根が見えてきました。留守なのか窓も玄関のドアもぜんぶ閉じています。

ママもお姉ちゃんも帰ってきません。

ニセネモチャンはどこへ行ったのでしょうか？

ネモチャンは待ちくたびれて、何回もとんぼ返りをしました。そのときです。植え込みから、小さな声がしてきました。

「ぼ、ぼくだよ、コラコラくんだよ」

そこには、小さな灰色のテントウムシがいました。

「どうしたの？ 赤く塗られたと思ったのに……」

「ぼくはね、飛ぶのよ！ 飛ぼうよ！ といった、ネモチャンの言葉を、決して、忘れない！ あれで、元気になれたんだから。だんだん力が出てきて、動けるようになった。それで、家に帰えったんだよ。そしたら、宇宙人のコラコラくんがいてね、ママが、ぼくを掃除機で吸い取ったのさ！！ もう、息が出来なくて、きたなくて、こんどこそ、死ぬかと思ったな。ママったら、『お、気味悪い、いやな虫！』っていったんだから。ぼくが、ぼくの部屋にいただけなのにさ。ぼく、ママに、テントウムシに変身したぼくを見て、びっくりして欲しかっただけなのに……」

灰色のテントウムシは咳こんでいます。

「かわいそう、シャワーを浴びたらいいのかも。でもネモチャンだって、パパに殺されるかと思

つたよ」

ねもちゃんが、パパに採集され、虫ピンで止められるところだった話をしました。

「ほんと、ぼくなんか、つぶれちゃってる。人間に戻りたいなあ！！ もう一度、UFOエリアにいつて、キャプテンに、たのんでみようよ？ 虫って、たいへんだもんなあ！！」

コラコラくんは最後まで、見たこともないほど、真面目くさっていました。

「コラコラくんのママも、うちのパパも、いちど虫になってみたらいいのよ！」

ネもちゃんが考え深そうな目をしていました。

「ぼくみたよ、宇宙人がすっかりぼくになってるとこ！」

話しながらネモチヤントンボと、コラコラテントウ虫はUFOエリアにむかいました。少し飛んでは、葉っぱの上で休みました。

でもやってきたところは校庭でした。二人とも、学校を休んでいるのが気になっていました。

「わたしたちのクラスをちよつとのぞいて見ましよう。先生なら助けてくれるかもしれないから……」

ネもちゃんがいました。

教室では、うわっ、ニセネモチヤンとニセコラコラくんが、先生と並んで教壇に立っているで

はありませんか？

「ネモちゃんもコラコラくんも、また100点満点とりました。すごいなあ！ さあ、みなさん、二人はどうしてこんなに成績がよくなったのでしょうか？ じゃあ、聞いてみましょうね！ ネモちゃんから、話して下さい！」

先生がいました。ニセネモちゃんが目を寄せて、ネモちゃんトンボをみ上げました。

「わたし、トンボだいき。ことに赤トンボがすき！ だから、トンボに糸を結んで飛ばしたりしません。でも、ネモは今まで、平気でそんなことをしてきました。虫の立場なんて考えて見たこともありませんでした。でも、わかったんです。本当にトンボになって、糸を結ばれて、引っ張られて。自分のしていたことが、どんなことなのか。わかったんです！ それに、わたしたち、試験になると、ベルトの……」

ネモちゃんトンボははさしくなつて、白い糸をひきずつて、逃げ出しました。

「ベルトのボタンを叩いたなんて、ニセネモちゃんはどうのかしら？」

「ぼく、言うと思うよ。宇宙人は勇気があるもの。ほんとのことを言つて、みんなをびっくりさせて、感心させて、ネモちゃんも、コラコラくんも学校中の人気者になるさ！！」

コラコラテントウムシが、遠くを見るような目をしました。

どこかで、ネモちゃんを呼ぶママの声がしていました。

もう、UFOエリアは、すぐそこです。

おわり